

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL. 02001)

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー  
身辺に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物

(思想・文学分野)

夏目漱石に学ぶ  
～ 西欧の模倣（外発的開化）を脱し、  
主体の確立（内発的開化）を ～

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2015年6月4日開催の第23回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。

※本テキストは、2016年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
—日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う—  
身边に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物

## 漱石と日本の近代化の矛盾

明治の文豪、夏目漱石は英国留学から帰国の後に、いくつかの講演を行います。そこで、漱石は、日本の表面的で即席の文明化（西欧化）を批判します。その後、漱石は、彼なりの個人主義を唱えたり、また、最後には禅的な境地に救いを求めたりもします。この漱石の葛藤は、明治に始まった西欧模倣の日本の近代化のひとつの典型とってよいでしょう。日本の近代化は、西欧的な学問や知識を身につけるところから始まり、そこに自我という意識がうまれてきます。しかし、そうすると、「日本的なもの」が見失われてゆき、この自我もきわめて頼りないものとなってゆくでしょう。漱石を導きの糸にしつつ、近代日本の知識人が直面した矛盾を考えてみたいと思います。

### 佐伯 啓思 (Keishi SAEKI)

1949 年生まれ。京都大学名誉教授、京都大学こころの未来研究センター特任教授。

共生文明学、現代文明論現代社会論、社会思想史を研究テーマとし、現代社会を文明論的観点から捉え、政治、経済の分野を中心に広く評論活動をおこなっている。

著書に『自由とは何か』（講談社現代新書 2004 年）、『日本という「価値」』（NTT 出版 2010 年）、『現代文明論講義ニヒリズムをめぐる京大生との対話』（ちくま新書 2011 年）、『西欧近代を問い直す』（PHP 文庫 2014 年）、『20 世紀とは何だったのか』（PHP 文庫 2015 年）など多数。



## 目次

### I はじめに ―夏目漱石の生立ちに垣間見える思想形成の跡

- (1) 夏目漱石の生立ち ― 親との確執
- (2) 夏目漱石の素養 ― 漢学と儒教

### II 夏目漱石が抱いた課題意識

- (1) 西欧的「近代化」の矛盾と夏目漱石の悩み
- (2) 日記に見る、夏目漱石（34歳）の嘆き  
― 「模倣」に終始する日本人。軽薄な「未練なき国民」。「理想」を失った青年―
- (3) 「文明開化」に突き進む日本人、自己中心主義への転落

### III 夏目漱石の哲学（ものの見方、生き方）

- (1) 評論「中身と形式」を読む
  - ① 実生活（実人生）は自由と規律の矛盾の中に
  - ② アメリカ由来の政治学、経済学では、日本の「構造改革」は無理
- (2) 評論「現代日本の開化」を読む
  - ① 「開化」の本質
    - (ア) 「開化（文明の進歩）」、二つの方向 。エネルギー節約型と浪費型
    - (イ) 多忙化をもたらすのみの「開化（文明の進歩）」
  - ② 日本特有の「開化」。外発的開化と内発的開化
    - (ア) 西欧的「文明開化」に踊り、「快樂（便利）」の無限競争の罠に
    - (イ) 上滑りの「文明開化」
  - ③ 今求められる知識人像 ― 内発的開化を構想する人
- (3) 評論「私の個人主義」を読む
  - ① 「模倣」を排して「自己本位」へ。―自分の生活から得られる感覚を信じて
  - ② エリート（権力、金力を有する者）には、倫理観が求められる

### IV 夏目漱石から学ぶに当たって、その視座

- (1) 外の「模倣」に急なあまり、生活実感から遊離していることはないか
- (2) 主体が欠落し、傍観者・部外者・観察者に終始していることはないか
- (3) 「不安」からの脱却の道。「自己本位」から更に「自己滅却（則天去私）」へ

### 質疑応答

次代を拓く君たちへ ― 佐伯啓思からのメッセージ ―

「頭でわかる」ことと、「心でわかる」こと

2015年6月4日開催

第23回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：漱石と日本の近代化の矛盾

講演者：佐伯 啓思（京都大学名誉教授、京都大学こころの未来研究センター特任教授）

## Ⅰ はじめに 一夏目漱石の生立ちに垣間見える思想形成の跡

夏目漱石を主題にしながら、日本の近代について私が考えることを話そうと思う。最初に弁明しておきたいが、人物に即して日本の近代を考えるシリーズを企画され、何か話してくれということだった。私は日本の近代史を研究しているわけではないので、思わず口をついたのが夏目漱石だった。特に理由があるわけではないが、漱石は昔から好きだった。

もともと私は奈良の生まれだが、大学はどうしても東京に行きたかった。そのひとつの理由は、親元を離れたかったこともあるが、もうひとつは、高校時代に漱石を多少読んでいたので、東京に行けば三四郎のような生活が待っているのではないかと思った。実際は全然違ったが・・・。

そういうこともあり漱石は昔から好きだったが、ただ漱石の小説を読んだのは随分昔の話で、今回の機会に改めて読んでみようと思ったが、それだけの時間がなかった。私は文学者でもないので、漱石の小説については触れることが出来ない。その代わり漱石には、数は少ないが評論のようなものというか、非常に有名な講演録がある。そのほかに日記や断片のようなものがある。

今日は講演録を中心にして、漱石のものの考え方のようなことを話させていただき、私なりに考えてみたいと思う。いずれにしても専門的な話は出来ないし、私も気楽に話すので、皆さんもあまり難しいことを考えずに聞いてもらいたいと思う。

この何年か、漱石の講演録を取り上げて、学生の少人数のゼミで学生に読ませたりしている。だいたい最初のうち学生は、漱石なんて今頃読んでも仕方がないという顔をしている。世代的な問題があるのかもしれないが、私たちの世代にとって漱石は必読文献であった。文系の思想やら日本文学などに関心を持っている者は漱石の小説や講演録などはだいたい読んでいたものである。しかし今の学生に漱石を読んでもかと言って、みんなあまりピンとこないようで、なぜ明治の人の文章を今読まないといけないのかという顔をしている。そうは言わずに読んでみろと言って若干無理やり読ませると、みんな面白がる。これは決して明治時代の話ではないという感じもしてきて、そこから多少細かい話も出てきて、本当に漱石の考えていることは意味があるのか、意味がないのか、そしてそういう問題が現代の我々の問題に直結するのかどうか、そういうことが議論になってくる。そこまで議論しだすと学生も面白くなってきて、いろんなことを言い出す。

ここ何年かはそういうことを経験したりして、私自身も漱石が明治の末年にやった講演

を改めて取り上げる価値は決して小さくはなかろうと思っている。そのあたりのことをみなさんにも考えてもらえたらと思う。今日の話は、岩波文庫の「漱石文明論集」<sup>1</sup> 1冊しか使わない。これ1冊で漱石の主要な考え方はだいたい網羅されている。日記や断片や書簡も多少入っているが、そこまで突っ込んでここで話すことではないと思う。

### (1) 夏目漱石の生立ち — 親との確執

念のために言うておくが、夏目漱石は明治に入る前の年、1867年に生まれている。亡くなったのは49歳、1916年（大正5年）で、随分早く亡くなっている。漱石の晩年というと、病気を抱えながら難しそうな顔をしているイメージがあり、成熟した思想を持っていたし、顔自体も成熟した立派な風合いを醸し出していることもあるが、それでも亡くなったのが49歳とは若い。昔の人と現代では年の取り方が違うから一概に言えないが、当時としても彼は早く亡くなっているから、そういう意味では彼の思想形成は非常に早かったし、ある程度早熟な人だったのかもしれない。

漱石を考える上でひとつどうしても無視できないのは彼の幼時体験である。彼は5人兄弟の末っ子で、両親が年をとってからの子どもだった。両親はそれを恥ずかしがって彼をすぐに養子に出してしまい、彼は両親の愛情を受けずに育った。お姉さんがお祭りの日に夜店のそばに一人おかれている漱石を見つけて不憫に思い連れて帰ったこともあったが、それでもまたすぐに養子に出されてしまった。親の愛情を受けなかったこと、家庭ということが彼にとって大きな問題になってくる。育ての親との間にもいろんな確執があったようで、そういうことが漱石の基本的な人生体験の原点にあることだ。これはよく言われる。



夏目漱石  
出典：小川一真, Public domain,  
Wikimedia Commons

### (2) 夏目漱石の素養 — 漢学と儒教

彼はもともと漢学の勉強を目指していて、一生懸命勉強している。当時の人はみんなそうであるが、儒教的教育、漢文の教育の素養がベースにある。彼は漢学を勉強しようと思って、東京にある儒教系の二松学舎<sup>2</sup>（今もある学校で、この間も甲子園に出場し、松山高校と対戦し、坊ちゃん対決などと言われた）に少し通っていた。一高に入るために英語を勉強しないといけないので英語を勉強しだし、それが結構面白かったようである。そこで一高に行き、出来たばかりの東京帝国大学英文科に入学し、そこで正岡子規と知り合った。英語は相当よく出来たようである。

<sup>1</sup>夏目漱石（著）、三好行雄（編）、岩波文庫、1986年

<sup>2</sup>学校法人 二松学舎 二松学舎大学附属高等学校

多少の紆余曲折の後、大学を出てから1、2年して松山中学に就職した。正岡子規の勧めがあったかどうか分からないが、彼が松山出身だったという事情もあったのかも知れない。松山に行ったが気風が肌に合わない、こんな田舎は嫌だと言って1年で辞めて、熊本の五高に行く。その2年目か3年目あたりにイギリスに留学する。彼はイギリスに行ったが、今度はイギリスが肌に合わず、非常にショックを受ける。本当に肌に合わなかったかどうかは分からないが、とにかく神経衰弱になった。日本にも漱石がロンドンで発狂したという知らせが来て、文科省は漱石に帰国命令を出し、2年間で日本に戻ってきた。その後神経衰弱の静養をしながら、東京帝国大学の講師に任命される。それも3~4年で辞めて朝日新聞に入社し、もっぱら小説家として自立する。東大を辞める時に狩野亨吉<sup>3</sup>から「京大に来ないか」という誘いがあった。彼は少し考えたようだが、東京にいたい、田舎に行きたくないと断った。とにかく東京を離れたくない気持ちが非常に強かったようで、東京に残って小説家として生きる。

これもしばしば言われることだが、小説を書き出してすぐ胃潰瘍で大病を患い、修善寺<sup>4</sup>で療養するが、瀕死の状態になった。この大病が彼の小説のスタイルをかなり変えて、漱石の人生観に大変大きな影響を及ぼしたと言われている。朝日新聞に入ったのが1907年(明治40年)、修善寺の大患が1910年(明治43年)なので、小説家として自立してやりだした3年目の時に、彼は瀕死の大病になり、それから数年後に亡くなった。彼が小説家として本当に活躍した期間は10年くらいで本当に短い。これがだいたいの彼の人生の流れである。

## II 夏目漱石が抱いた課題意識

### (1) 西欧的「近代化」の矛盾と夏目漱石の悩み

今日取り上げる講演だが、あらかじめ結論的なことをいうと、彼が一生かけて取り組んだテーマは、簡単に言うところのことである。日本がどんどん西洋化する。自らも英文学者でイギリスまで出かけて行った。西洋の文明のど真ん中に入り込んでしまった。しかしどうもそれが自分に合わない。自分の心の在り方がどうも納得出来ない。これが彼の個人的な苦しみであった。そこに自らの生まれや人間関係などの個人的な問題もある。

こういう西洋化の中で学者としてキャリアを歩み出したが、それが自分の精神に落ち込んでこないという悩みをずっと抱えていた。それが個人の悩みであるだけならいいが、明治の日本の縮図、明治の日本の大きな矛盾がそこに示されていることを、漱石自身も感じている。個人的に問題を抱えているだけならいいが、彼の神経衰弱は、ただ彼だけの話だけではなく、明治から大正に入ってくる日本の近代化という時代が持っているある種の問題が、彼を通して現れてきている。これが漱石の面白さ、特に漱石の評論を読む面白さである。

---

<sup>3</sup> 狩野亨吉…1865年9月17日～1942年(昭和17年)12月22日、)日本の教育者。第一高等学校の校長、京都帝国大学文科大学初代学長を務める

<sup>4</sup> 静岡県伊豆市修善寺町

## (2) 日記に見る、夏目漱石 (34 歳) の嘆き

—「模倣」に終始する日本人。軽薄な「未練なき国民」。「理想」を失った青年—

彼がイギリス留学するのは 33 歳の時で、ちょうどイギリスに行く頃から、日本が西洋的な形で近代化せざるを得ない、それがどうも日本人の心にしっくりこない、という問題を日記などに書いている。いくつか読んでみたい。明治 34 年、漱石が 34 歳の日記にこんなことが書いてある。昔の文体なので私なりに現代文にアレンジして読んでみる。

—日本は 30 年前に目覚めた。しかし、半鐘の声で急に飛び起きてしまった。その目覚め方は本当の目覚めではない。狼狽している。ただ西洋からいろんなものを吸収するのがあまりに急で消化する暇がない。文学も政治も商業もそうである。日本は真に目覚めなければならない。<sup>5</sup>

かなり早くから彼は日本の近代が極めて変則的であることを問題意識している。同じ時期に書かれた断片にもこんなことが書かれている。

—人は日本をして未練なき国民だという。数百年来の風習や習慣を朝飯前のように打破して、遺憾とっていない。これはなるほど未練なき国民である。良い意味で未練なき国民かという、甚だ疑問である。西洋人が日本を称賛するのは、日本が西洋を模倣しているからである。支那人を軽蔑するのは、支那人が西洋を模倣していないからである。西洋人が日本を称賛するのは、我が国民が未練をもたないことということを含んでいる。こういうことを名誉だと思うことは間違っている。熟慮の末に捨てなければならないと覚悟して捨てる、過去を去っていくのは良い意味での未練である。しかし、目前の目新しい景色に幻惑されて、一時の好奇心に駆られて百年の習慣を去っているのは、これは悪い意味での未練である。<sup>6</sup>

—日本人は一時の発作にてすべての風俗を捨ててしまっている。また後からそれを拾い集めようとしている。俳句は一度捨てられたのにまた起こってきている。茶の湯は一度退けられたのに、また起こってきている。そんなことをやってもしょうがない。<sup>7</sup>

—日本人は創造力が欠けた国民である。維新前の日本人はひたすら支那人を模倣して喜んでいた。維新後の日本人は第一に西洋を模倣してまた喜んでいる。哀れなる日本人は第一に西洋人を模倣して、経済の点においても便利の点においても、発作後に起こる過去が懐かしくなる念に駆られながらも、どんなにがんばってみても西洋化出来ないことに気付いてしまった。<sup>8</sup>

<sup>5</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p305

<sup>6</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p309

<sup>7</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p309

<sup>8</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p310

－開化が無価値であることを知りながらも、しかしこれを免れることを出来ない。そういうことを知った時に第二の厭世観をきたす。こういう状態に我々はある。<sup>9</sup>

－現代の青年は理想というものを持たない、理想がない。過去に理想を持たず、現在にも理想がない。家庭にあつては父や母を理想としない。学校にあつても教師を理想としない。社会にあつても紳士を理想としない。事実上彼らは理想がなくなっている。父母を軽蔑し、教師を軽蔑し、先輩を軽蔑し、紳士を軽蔑している。これらを本当に軽蔑することが出来るなら、それは本当に立派なことであるが、軽蔑する者には自己たる理想がなければならぬ。自分の理想がなくて軽蔑しているだけではだめである。自己に理想がなくしてこれらを軽蔑するは墮落なり。現代の青年は滔々として日に日に墮落しつつある。<sup>10</sup>

かなり厳しいことを書いているが、こういうことは昔の事ではないような気がする。

### (3) 「文明開化」に突き進む日本人、自己中心主義への転落

若者のことを悪くいうつもりはないが、社会の風潮として言えば漱石の苦言は当たっている気もしてくる。20世紀の人間は、自分と縁の遠い昔の人はいくらでも尊敬すること、理想化することが出来る。しかし、自分と同じ時代に生きる人を尊敬することが出来ない。自分に利害関係のない人は立派だと言うが、今生きている同時代の人を尊敬することが出来ない。こういう傾向を極端までいくとどうなるかということ、自分自身しか崇拜することが出来ない自己崇拜に陥ってしまうと言っている。

個人は崇拜しても崇拜しなくてもどちらでもいいが、自分の利益に関係しない別の話だと、わりと公平に議論することが出来る。しかし今生きている人については、みんな利害関係をもっているから、なかなか簡単に尊敬するとは言えない。うちの下女が旦那の欠点を列挙するようなものだ、と彼は言う。しかしそういうことをやっていると、やがて人々を崇拜することが出来なくなって、人々を尊敬出来ない者が自分を崇拜している一種の自己中心主義に陥ってしまう。こういうところが彼は鋭く、面白いと思う。現代の日本人が視野狭窄に陥り、いつの間にか自分のことしか関心を持たなくなる、と言う。彼はこういうことを考えながらイギリスで神経衰弱になり、帰ってきて小説を書き出す。つまり英文学者としての道を自ら断った。

---

<sup>9</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p320

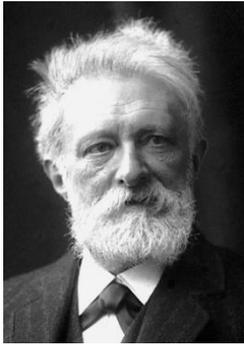
<sup>10</sup> 岩波文庫「漱石文明論集」p320

### III 夏目漱石の哲学（ものの見方、生き方）

#### （1）評論「中身と形式」を読む

##### ① 実生活（実人生）は自由と規律の矛盾の中に

朝日新聞に入った後、朝日新聞主催の講演会で関西を周り、大阪、堺、和歌山あたりで講演した講演録がいくつか残っている。この本にも3つ4つ収められている。これらはなかなか面白く、みんな違うことを言っているが基本的な主題は同じである。例えば明治44年、漱石が44歳の時に堺で講演した「中身と形式」<sup>11</sup>という講演録があるが、ここで彼はこのようなことを言っている。



Rudolf Christoph Eucken  
Public domain, via  
Wikimedia Commons

ドイツにオイケン<sup>12</sup>という有名な哲学者がいて、オイケンの本を読んでも、彼がこんなことを言っている。一方で自由が大事だと言う、他方で社会の規律や秩序が大事だと言う。これはおかしいからどちらかにしないといけない。漱石はオイケンのこのような言い方はおかしいと言う。我々が生活する中で矛盾することはいくらでもある。自由が大事だけれども、秩序が大事だったりすることは当たり前のことである。朝から晩まで自由に暮らせると言うことがおかしい。

自由である時間は大事だが、同時に規律も大事である。例えば、会社に行って会社で働く時は自由ではいけない。9時なら9時に出勤しないといけない。みんなが好きなことをしてはだめで、それなりに上司の命令をある程度聞いて規律を守らなくてはならない。しかし会社から出て家に帰ってからや、途中で友達と遊ぶ時に規律が大事かという、自分の好きなようにすればよい。規律も自由も両方必要だ、矛盾することが人間にあって、矛盾することが両方とも大事なことは当たり前である。どうしてオイケンのような学者が、これは矛盾するからどちらかにしないといけないというようなバカなことを言っているのか、と彼は書いている。これは非常に面白い。つまり、学者・知識人のいうことは全然当てにならないという。

学者・知識人は、頭の中で考えた理屈しか言わない、頭の中で考えた「AとBは矛盾するから、Aを取るかBを取るか、どちらかにしろ」という話しかしない。しかし実生活から出発すれば、いくらでも矛盾することがあって、矛盾することの中で我々は生きていて、それを勝手にどちらかに片づけることは出来なくて、その矛盾することをうまく調和させながらやっていくことが実生活の常識、実生活での人間の知恵だと彼は言っている。こういうところは漱石の基本的なものの見方、生き方みたいなものがあって面白い。

例えば、傍観者の態度に甘んずる学者が、部外から観察して、ある法則や規則を唱え、一つの形式を打ち立てる。こういう形式を後生大事にして、形式ですべてを割り切ろうとした

<sup>11</sup> 明治44年8月堺にて講演

<sup>12</sup> ルドルフ・クリストフ・オイケン (Rudolf Christoph Eucken)：1846年～1926年、ドイツの哲学者。ノーベル文学賞受賞者。

らとんでもないことになる、うまくいかない。我々の生活の具体的な中身から出てくるような、まずは内容があって、内容に合わせた形式を作らないといけないと彼は言っている。それが「中身と形式」という講演である。

形式や形のために我々の生活の内容があるのではなく、逆である。むしろ我々の実際生活が、学者の言うような学者的態度で、観察一方から形式を調える方向とは違ったような形を生み出すのだ。我々の日常生活や日常生活の経験が大事である。学者が外から観察してあれこれいうことは信用出来ない。

ここには二重の意味がある。つまり、一般的に庶民と言われる特に知識を持たず生活している普通の人々と、多かれ少なかれどこかで理論や学説や学問をやっている、その頭の中が学問的なものの考え方でいっぱいになっている、その学問的なものの考え方から実生活を見ようとする知識人、この二つの間に矛盾、対立があり、話がうまくいかない。近代社会というのは学者が頭の中で考えてきた形を無理やり実生活に押し付けようとしている、しかし庶民はそれに納得できない。納得出来ないのに、いつのまにかズルズル引きずられている。そういうことに対する腹立たしさ、苛立ちがある。

しかしそこにさらに重要な、やっかいな事情がある。それは、知識人が頭の中で考える形というのは、概して西洋から入ってきたもの、西洋的な学問である。西洋は合理主義で、西洋的な学問というのは先ほどのオイケンの話のように、AとBが矛盾したらAを取るかBを取るかはっきりしろ、というようなものである。そういうところで出来上がった学問を日本に持ち込んできて、それを日本の明治の形だ、新しい形だ、それが近代だとして押し付けようとしている。そういうことに対して漱石は苛立っている。

## ② アメリカ由来の政治学、経済学では、日本の「構造改革」は無理

このことを考えると、私はここ20年くらいの構造改革のことを考えてしまう。経済構造改革や政治改革というのは20年ほど前に始まったが、アメリカ経済学、アメリカ政治学の影響を強く受けている。アメリカ政治学は、民主主義は二大政党制で、民意が反映されなければならない。これがアメリカ政治学の基本的な狙いである。経済学の方は、市場競争が徹底して自由競争でなければならない。これがアメリカ経済学の基本的な考え方である。その考え方を、日本のジャーナリストや評論家などが90年代の初めに日本に持ち込んできて、それで構造改革を唱えた。しかし日本の実態を見るとそう簡単にいかない。アメリカのような自由競争を日本でやれといってもそもそも無理である。政治改革をして、二大政党制をやれといっても無理である。右と左の間に例えば公明党のような政党があつたりする。するとそれだけで二大政党にはならない。

政権選択などは日本の政治にどうも合わない。経済構造改革の方も、いわゆる日本的経営方式をなくしてアメリカ型の自由競争をやれという話を、学者、評論家がやり、官僚もそれをやった。しかし日本経済は全然よくなるしないし、それどころか日本型経営システムは崩壊するし、かといってアメリカ型のような自由競争にもならない。これはまさに漱石が言うよ

うに、知識人が外国から出来上った形だけ持ってきて、形を日本に無理やりあてはめようとして、そうすれば日本が近代化するという話をした。それはやはりうまくいかない。漱石はそういうことを非常に早い段階から言っている。知識人は頭の中で考えて合理的にやろうとするが、実生活の中にはいろいろ矛盾することがあって、我々はその矛盾をなんとか調整しながらやっている。それが実生活であり、具体的な経験である。こういうことは非常に面白いと思う。

## (2) 評論「現代日本の開化」を読む

### ① 「開化」の本質

これに続いて、非常に有名な講演が和歌山で行われる。それが「現代日本の開化」<sup>13</sup>で、夏目漱石の講演の中で、一番有名な講演である。これは非常に分かりやすい講演である。「現代日本の開化」の講演の中で、非常に有名な言葉を彼は持ち出す。開化、近代化、文明化にも二種類ある。ひとつは外発的開化。つまり外国のものを、外から取り入れる形、あるいは外から強制された形で文明が進歩していくものである。もう一つは内発的開化。自分の中からごく自然に新しいものが生み出されていって社会が変わっていくというものである。開化にはこの2つがあって、言うまでもなく日本は内発的開化でなく外発的開化でやってきた。そこに最大の問題があるというのがこの講演の主題だ。

### (ア) 「開化（文明の進歩）」、二つの方向。エネルギー節約型と浪費型

開化とは、人間活力の発展の経路、人間の活力を発揮する経路で、これが文明の進歩、文明の開化である。その場合に2つの方向がある。ひとつは出来るだけ無駄な努力を省こうとする、エネルギーを節約する方向で人間の活力が発揮される。例えば昔は、江戸から京都まで歩いてしたが、歩くのがあまりに労力がかかるので、籠になり、やがて汽車ができ、自動車ができ、現代なら新幹線が通る。これはエネルギー省略、節約の方向での文明の進歩と言ってよい。

もう一つは、エネルギーを浪費しようとする、無駄なエネルギーを使おうとする方向である。例えば、自動車はただ移動するだけで出来たものでなく、行楽地に行き遊びたい、出来るだけ遠くに行き遊びたいというもの。これはエネルギーを投入する方の文明化である。一つの遊び、道楽である。人間は一方で節約するが、一方でエネルギーを浪費して快楽を得ようとする。飛行機に乗って出来るだけ遠くに行き遊びに行きたい、見たことのない景色を見たい、こういうことは快楽追求の開化だ。そもそもエネルギーを節約する方向と、エネルギーを使おうとしてより多くの快楽を求めようとする方向と、二つの矛盾するものが二輪立てになって近代化、開化が進められて来た。

---

<sup>13</sup>明治44年8月和歌山にて講演

### (イ) 多忙化をもたらすのみの「開化（文明の進歩）」

その結果としてどうなったか。我々は一方でエネルギーを節約しようとする、出来るだけのんびりと暇な自由な時間を作りたい。ところが他方で、暇な時間が出来ると、その暇な時間にエネルギーを費やして出来るだけ快樂や楽しみを得ようとする。結果として自由な時間、暇な時間はなくなってしまって、ちょっと時間が出来ればもっと大きな快樂を得たいと思う。そしてもっと大きな快樂を得るために、エネルギーを節約して、もっと新しい文明の機器を作り出す。両方足し合わせていると何をしているかよく分からない。ただただひたすら楽しむために忙しく動き回り、ひたすら働いているだけで、結果としてなら本当の意味の自由時間も暇な時間も物事をゆっくり考える時間もなくなってしまった。文明が進めば進むほど人間は忙しくなってしまった。これはおかしい、こういうことが我々をおかしくしている。現在このことは西洋でもどこでも同じで、世界中で起こっている。

### ② 日本特有の「開化」。外発的開化と内発的開化

しかし日本はそれにプラスアルファがあって、それだけでは話がすまない。それが先ほどの外発的開化、内発的開化の違いだ。西洋人は内発的に文明を進歩させてきた。それを見た日本人は、この西洋に負けてはならないと思った。西洋の文明の進歩をすごいものだと思い、そうなりたと思った。もっと言えば、西洋的なものが急激に押し寄せてきて、それによって今まで昼寝していたのがいっぺんに起こされたようなものである。それで今度は慌てて、西洋が100年でやったことを30年でやろうとした。西洋だってかなり大変なことをやったのに、それを無茶苦茶なスピードでやろうとした。これはおかしくならないはずがない。これが外発的開化である。

### (ア) 西欧的「文明開化」に踊り、「快樂（便利）」の無限競争の罠に

もっと快樂を得たい、もっと楽しみを得たい、そのために機械化して、機械的文明を作っていかなければならない、こういうことが日本の中から出てきたのならいいが、そうではなくて日本の場合には西洋を見て、西洋の先進文明に大きなショックを受けて、こんな風になりたいと思ってやりだした。やりだしたけれども、それを100年のところを30年でやろうとしているから、ますますおかしくなってしまう。これが「現代日本の開化」の講演で言っている基本的な物の考え方だ。こういう文明開化が進めば進むほど競争がますます激しくなって、生活がますます困難になってしまう。昔の人は生きるか死ぬかという競争をしていたのに、現代人は生きるか死ぬかという段階は通り過ぎてしまって、どうやって生きるか、どうやってもっと楽しく生きるかという競争をしている。その競争はとどまる場所を知らない。どこまでいってもそういう世界から抜けることが出来なくなってしまった。我々はそんなことを本当は欲していないだろう。欲していないのにそういう世界に入ってしまった。現代の日本人は、こういう極めて不自然な発展を余儀なくされている。

### (イ) 上滑りの「文明開化」

漱石の時代は、多くの人が文明開化に踊らされたというか、基本的に多くの人が文明化を歓迎していた時代ではある。日本が一等国になり、日清・日露戦争でも勝利した。漱石が亡くなる 1916 年は第一次大戦の最中で、日本はその大戦で火事場どろぼうのような形で戦勝国になった。日本国中がおそらく日本が西洋に追いつく、日本は素晴らしい文明の進歩を遂げてきたと言っている時代だった。そういう時代に漱石は、こういうことをやっていたらだめだと言っていた。漱石は最後にこういうことを言う。

ただただ日本は文明の上皮を滑っていつているだけだ。あるいは滑るまいと踏ん張って神経衰弱になっている。そうだとすればどうも日本人は気の毒というべきか、哀れというべきか、真に言語道断の窮状に陥ったものである。私の結論は、それだけにすぎない。あのようになさい、このようになさいというわけではない、どうすることもできない。実に困ったと嘆息するだけで、極めて悲観的な結論である。

これは残念なことであるが、だからと言って西洋的近代化から抜け出すわけにはいかない。西洋的近代化の中に入ってしまったら、この道を逸脱するわけにはいかない。このことをまともに考えて、日本というものを踏ん張ろうとしたら、日本人はみんな神経衰弱になると彼は言っている。しかし、それはしょうがない。そういう悲観的な結論しか自分には出てこない。漱石自身がそういう人生を生きただけであった。

### ③ 今求められる知識人像 — 内発的開化を構想する人

先ほど学生にこういうものを読ませたらどんな反応をするかという話をしたが、「現代日本の開化」を読むと、基本的には現代と同じだという。グローバリズムの中でグローバルスタンダードのようなものが出来て、アメリカがそれを日本に押し付けたり、日本がそれに飛びついたりしている。そういう世界に入ってくる、安倍首相もそういうことをやっている。しかし一度そういう経路に入ってしまうと、止めるわけにはいかない。止めるわけにはいかないが、本当にそういう意味で自分の中から内発的かつ自発的にやっているかというのと、そうは言い切れない。どこか他所事で、向こうから来る者に防戦しているというか、適応しているというか、受け身である。そういう感じが非常に強い。

私は現代でも同じだという感じがする。そうだとすれば本質的なことは漱石の時代とあまり変わっていないと思う。違いは、漱石はそういうことを敏感に感じとり、当時の第一級の知識人がこういうことを真剣に考えた。しかし今はこういう発言をする人がほとんどいなくなった。特にテレビに出ている知識人たちは、グローバリズム万歳がほとんどで、新聞の論調も日本は負けるな、この風潮から取り残されるな、バスに乗り遅れるなという風潮がほとんどである。そういうことが残念である。たしかにどうにもならないが、本当にそれでいいのかと考える人が必要で、そういうことが本当は知識人の役割だと思う。それは向こうから形を持って来て、外国にある学問・知識を形にして持ち込むのではなく、自分たちの経験から出てくる何かを形にしていく、そういう知識人が今本当は必要だと思う。

### (3) 評論「私の個人主義」を読む

#### ① 「模倣」を排して「自己本位」へ。—自分の生活から得られる感覚を信じて

漱石の講演の中で、有名なものがもうひとつある。それは、大正3年、漱石が亡くなる少し前に学習院大学でやった「私の個人主義」<sup>14</sup>という講演である。ここで彼の基本的な生き方のようなものを打ち出してくる。今日の話の前半で触れたように漱石は、自分は英文学をやったけれども面白くない、頭の中では色々分かるけれども自分の実感として感じられない、英文学者としてやろうとすればするほど神経が参って、神経衰弱になった。それをどうやって脱することが出来たのか述べた講演である。

そこで彼が打ち出すのが、有名な「自己本位」、つまり自分だけを頼りにして自分だけを信じるという考え方である。イギリス人や西洋人の人まねをやってもだめだ。例えば英文学者として頑張っているいろんなことをやって発表などしたら、西洋人に褒められる。しかしいくら人に褒められても、元々人の着物を着て威張っているだけだから、実に内容は不十分で、心は何時まで経っても不安定で不安である。人のクジャクの羽をまもって威張っているようなもので、そういうことが耐えられなくなってきた。そこで自分が考え出したのが、文芸に対する自己の立脚点を固める、新しく建設するために文芸とは全く関係ない書物を読み始めた。そこで得られたのが、自己本位という4文字であると言っている。自己本位というのは、自分の経験、自分の実生活から得られる感覚しか信じない、それだけでいいのではないかというもの。簡単にいえば、人の模倣をしたりすることはやめようという一種の独立心である。

自分をひとつの生きた独立者として捉えればよいではないかということで、考えてみれば当然のことで、難しいことではない。難しいことではないが、近代日本にはなかなか出来ない。文明開化と言って騒いでみたり、西洋から入ってきた新しいものを喜んでみたり、特に知識人は人のクジャクの羽を着て威張っている。そんなものは全部脱ぎ捨ててしまえばいいと言う。これは有名な講演で、漱石が個人主義というものを捉えたものだと言われている。つまり、近代的個人主義とか、近代的自我に目覚めたとかよく言われるが、そんなものではないと私は思う。我々が言っているような個人主義そのものが西洋的概念で、彼はそんなことを言っているわけではない。むしろごく当然の、自分が実感として信じられるものだけを確かめてみよう、実生活の中で大事なことをきちんとやっていこう、そういうことを言っていると思う。

#### ② エリート（権力、金力を有する者）には、倫理観が求められる

この講演は学習院の学生に向かって言ったものだが、学習院は当時のエリート大学だったので、社会の指導者になる人たちに向かって言ったものである。この講演の後半で、こんなことを言っている。あなた方はこれから社会的に非常に高い地位に就く。社会的地位が高

<sup>14</sup> 大正3年11月25日学習院輔仁会にて講演

いということは権力も持つし、お金も入ってくる。しかしそういうことには注意しないといけない。権力を持つということはそれなりの責任があり義務が発生する。例えば社会的地位が高くなって学者にでもなるとすると、自分は西洋のこんなことを知って、勉強していて、こんなことをやっているということ、権威として教えるのでなく、そこにもっと大きな義務を伴うものである。そういうことから自分は何を学んだかを学生に分かるように話さないといけない。学問をするためには、ただ学問を一つの社会的な衣としてまとうのでなく、それを社会的に広めていく義務もある。権力、地位には義務がある。お金も同じで、お金を使うにはお金を使う責任がある。無駄なお金の使い方はしてはならない現代で言えば、金融市場で金を儲けるような使い方はしてはいけない。お金を持つということは、お金に対するそれなりの責任を伴うということをおきまえてほしいということも言っている。

権力や金力を持つ人にはそれなりの倫理が必要である。いやしくも倫理的にある程度の修養を積んだ人でなければ、権力や金力を以って自分の個性を発揮することも出来ない。先ほどの自己本位というのは利己心ではない。自分が持った権力や金力を自由に使うという意味ではない。あるいは自分の個性を自分で好きなように使うという意味ではない。それには義務や責任が伴い、倫理観が必要である。だから倫理的にある程度の修養を積んだ人でなければ、自分の個性を発揮する価値もない、権力を使う価値もない、金力を使う価値もない、と彼は言っている。あくまでも大事なものは人格である。学問をするということも、本当は人格を高めるためにやる。権力や金力を得るためにやるのではない。当たり前なことだが難しい。こういうところに漱石の彼らしい人柄、ある種の倫理観がある。もともとの素養が漢学とか儒教から出発していることも大きいと思う。

#### IV 夏目漱石から学ぶに当たって、その視座

最後に、私なりに漱石という人にまつわってどういうことを考えればいいのか、ということをおきまえておきたい。

##### (1) 外の「模倣」に急なあまり、生活実感から遊離していることはないか

一つは、科学とか学問を学んだ知識人は、本当は一体何をすべきか、どういう存在であるべきか、という問題である。特に当時の明治の知識人は、とにかく西洋の知識や技術を導入した。東京帝国大学もヨーロッパのものを導入するために出来た大学である。それは工学系も法学系も同じで、帝国大学というのは基本的に西洋の物を導入することで日本の近代化に寄与する役割があり、京大の場合は少し違うが、特に東大はそうであった。そういうところで出来上がってきた知識・科学が、人間の生活実感、日常の経験からどんどん離れていっているという問題がある。これは漱石が扱っていた問題のひとつである。漱石自身にはその両面がある。漱石は一方で英文学者なので西洋の学問をやっている。しかし彼は生活の中でいろんな苦勞をしている。子どももたくさんいて、妻との関係も安定せず生活を組み立

てるだけで随分苦勞している。そういう生活者としての苦勞を、どういう形でうまくつなげたらよいか、そのことに漱石自身も悩んでいる。最終的に小説を書くことによって経験的なものと観念的なものをなんとかつなげようとするが、最後までうまくいかなかった。そこで自己本位ということに行きついたが、実際にはそれでもなかなかうまくいかず、さらに「則天去私」という禅的な境地を得ようとする。そういう知識人としての苦悩があり、大きく言えば近代日本の知識人は一体何であるかという問題がある。

## (2) 主体が欠落し、傍観者・部外者・観察者に終始していることはないか

二つ目は、今の話と関係するが、西洋対日本の問題がある。日本の知識人が常に日本の現実から浮き上がってしまうのは、その知識が外国から来たもので、外国の眼で日本を見ている、日本の生活実感の中に入らないで部外者として日本を見ている、傍観者・部外者・観察者として物を見るということが問題であると言っている。日本人は西洋の物の考え方と違う。西洋の基本的な考え方は、現実を一步離れる、特に現実について論ずるものは、出来るだけ現実を客観化して対象化して、現実を離れたところに主体を置く。出来るだけ観察者として現実を眺めるのがいい、というのが基本的な西洋の哲学や科学の立場である。そういう立場を漱石はとらない。日本人とはどうもそういうところがあって、たとえば、西田哲学（西田幾多郎<sup>15</sup>の哲学）の一番重要なポイントもそこにある。西洋哲学は世界というものとそれを見る自分を分けてしまう、主体と客体を分けてしまう、それが間違っているというのが西田哲学の出発点である。主も客も世界の中に入っている、世界の中で動きながら人間は考えたり、直観的に物を理解したりしている。これが西田哲学の出発点で、漱石も同じようなことを考えていた。傍観者・観察者として世間を見ることは出来ない、世間の中で考えることが大事で、そこから出発する。それは科学にはならないから文学や小説になる。そういう問題がある。



西田幾多郎  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

## (3) 「不安」からの脱却の道。「自己本位」から更に「自己滅却（則天去私）」へ

三つ目は、漱石の中にいつも自分に対する不安感があることである。自分は人に認められているか、自分は何をするために生きているか、何をすれば世間に認められるか、世間に貢献出来るか、そういうことに対する確信が持てない。それは、ひとつは漱石個人の問題でもある。小さい時に養子に出されて、自分の居場所がなくなってしまった、どこに行っても居候している、そういう気持ちが強い。漱石の中で、自分は余計な人間だという意識が強い。根なし草のようで浮動しているという意識が強い。それは彼の個人的な人生の中で出てきた問題である。

<sup>15</sup> 西田幾多郎：1870年5月19日～1945年6月7日、)日本を代表する哲学者。京都学派の創始者。

同時に、漱石に限らず、当時の日本において広い意味での知識というものに携わった人は、かなりそういう気分を持っていたと思う。つまり、どの世界にも属せない。西洋の学問を勉強したけど西洋人でもない、しかし日本の考え方はどこかそのまま信じていることが出来なくなってしまう。西洋でもない、日本でもない、外から見た観察者でもない、あるいは中に入り込んでいるわけではない。

漱石が自分について書いたものは、たいへんな観察眼だと思う。晩年になって書いた「硝子戸の中」<sup>16</sup>、「思ひだすことなど」<sup>17</sup>というエッセイがいくつかあり、自分のことや日常の出来事、昔の記憶などを書いているが、自分についての観察の仕方はたいへんに鋭い。自分を外から客観的に眺めているが、それは同時に自分の内面をのぞき込むようなものだ。そして、その自己は常にいろいろなややこしい人間関係の中で動いている。

彼にはそういう両面がある。彼は学者に対する違和感を強く持っているが、彼には学者的な資質がある。観察者として非常に鋭い観察が出来た人である。しかしそれを学的にやるのではなく、自分の内面を観察している、自分の内部を見つめるという解釈へと向かっている。いずれにしても観察している自分と観察されて現実の中で動いている自分の曖昧さ、揺れ動きのようなものがある。現実の中にすっぽりと埋もれるわけにもいかない。現実の中であたふたしている自分をもう一方で見てしまう。見てしまうから辛い。そういう不安、二重性がある。

こういうことを社会学ではマージナルマン<sup>18</sup>、境界人という言い方をする。境界人は境界にあってどちらにも属しているとも言えるし、どちらにも属してないとも言える。どちらにも属している人はある意味で器用に行き来するが、漱石はどちらにも属さないという意識が強かったと思う。西洋にも属さないし、かといって自分が典型的な日本人ということでもない。西洋の猿真似をして喜んでいる日本人は大嫌いだと言って、彼はその当時の日本人をもまた非常に嫌っている。日本人に同調することも出来ないし、そうかと言って西洋人でもない。マージナルマン、境界人だけれども、どちらにも属さないような境界に佇んでしまう。

最後はどうなるかという、自己本位で自分だけでいいというのがそれでも納得いかなかった。これは漱石自身が言った言葉ではなく、弟子が言った言葉のようだが、先にも述べた則天去私、つまり自己滅却、自己を捨てる、自己本位の反対、自己本位を突き抜ける、自己を徹底して突き抜けて自己を無くす、一種の自己否定、自己滅却、そういう境地に憧れ、近づこうとしたと言われている。それは事実だと思う。特に大病をしてから書いたエッセイはそういう方向に向かって行く。死というものを目の前にしたら生というものは非常にささやかなものだ。しかし確かに人間は生きたいと思うものである。生きたいと思った時に、自

<sup>16</sup> 1915年1月-2月、『朝日新聞』/1915年3月、岩波書店

<sup>17</sup> 1910年-1911年、『朝日新聞』/1911年8月、春陽堂刊『切抜帖より』収録

<sup>18</sup> マージナルマン (marginal man)：文化の異なる複数の集団に属し、そのいずれにも完全には所属することができず、それぞれの集団の境界にいる人。境界人。周辺人。

分はいろんな人間に支えられて、自分が入院したらいろんな人がお見舞いに来てくれるし、いろんな人が気にかけてくれる、それはそれで有難いことではないか、と書いたりしている。彼の死生観がそこに現れていて、大病以降、死というものを自分は決して恐れはしないし、死という大きなものを前と言えば生きていることはささやかな事柄である、と書いている。

こういう経験を経て出来るだけ自己を捨てていくという方向に向かって行く。ヨーロッパの知識人のことはあまり知らないが、ヨーロッパの知識人でこういう境地になった人はおそろくないと思う。例えばニーチェ<sup>19</sup>という哲学者がいるが、彼も最後は自己滅却という境地にはいかない。最後まで、「自分が、自分が」、「我が、我が」というところで留まって、それで発狂していく。最後に自己滅却という方向に行くのは日本の知識人なり日本人のあり方のひとつの典型、ひとつのタイプを表している。それは日本人にとっては一方で一つの逃げ道でもあるし、他方では心の安定を得るためのひとつの大事なやり方だと思う。漱石は49歳に病気で亡くなるが、最後どんな気持ちであったかはよく分からない。しかし誰かの証言によると、死に際に横でずっと泣いていた自分のお嬢さんに、「もういいよ、もういいんだよ」と言って亡くなった、という話が残っている。

漱石という人を通して今述べてきた問題は、現代日本でも決して過ぎ去った問題ではない。それどころか漱石の時代よりもっと深刻な形になって目の前に突き付けられていると思う。自己滅却のような禅のようなものが、なかなか我々は手にすることが出来なくなったので、本当に逃げ道がなくなっている感じがする。非常に悲観的な話をして恐縮だが、私自身は気分的には悲観的ではない。これが、近代日本人が辿ってきた道だと思えば、そういうことを我々が今また同じことを繰り返しているだけだということだけのことで、昔の人たちがやってきた苦労をもう一回引き受ければよいというような気持ちである。そういうことをみなさんにも考えていただければと思う。

---

<sup>19</sup> フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) : 1844年～1900年。ドイツの古典文献学者、哲学者。

## 質疑応答

- Q1 漱石は、グローバリストか、ローカリストか。
- Q2 体質は異なる西田と漱石、その向う先は同じか。
- Q3 西洋的近代化の過程で、「主体」感を喪失した日本人。彼らは、何を求めたか。
- Q4 漱石は、自らを「知識人」として意識していたか。
- Q5 文章の達人、漱石の資質を如何に評価するか。

### Q1 漱石は、グローバリストか、ローカリストか。

漱石がイギリスに行った時には、その時点ではローカルなものを捨ててグローバルなものに同化しないとやっていけない、それは自分だけの問題でなく日本の生きる道でもある、日本の知識人としてそういう役割を果たすべきだということがあったと思う。しかしその中で生きづらいものを感じて、自己本位に立ち返り、最後は則天去私という境地に至ったが、それは「グローバルからローカル」に戻ったということか。それはもう一段進んだ形になって、最初に日本や漱石が求めていたものとは違うレベルなのか教えていただきたい。

#### (佐伯)

そういうことについては漱石がはっきりと書いていないので、漱石自身がどういう気持ちだったのかよく分からないので、私の解釈になるが、結局漱石は少なくともいわゆるグローバリストではない。グローバル化は横に広がっていく、空間的に広がっていく。則天去私や自己本位はそうではなく、横に広がるというよりは縦軸の問題のような気がする。今ここにいる「私」の心の底へ降りてゆき、他方でその「私」を超えるものを思い出そうとする。

自己というものの奥底を覗いていったら、自己本位でやってみたけれども、たしかな軸もやはりない。そこにいる人たちが自分を支えてくれたらその人たちに感謝する、それでいい。そういう形で自分が支えられて生きているということ、それが分かればそれでいいという一種の仏教的な境地、広い意味での宗教的な境地だと私は思う。ローカルかグローバルの問題は抜けてしまっていて、少なくともそういうものとは違う次元で自分の居場所を求めていたのだと思う。

### Q2 体質の異なる西田と漱石、その向う先は同じか。

漱石と西田哲学と通ずるところがあるとお話しされたが、素直につながらないところがある。「夢十夜」<sup>20</sup>や「硝子戸の中」など恐ろしいような世界観がある。漱石の場合は極めて特異なので、どのようなアプローチをすればよいか。あるいは漱石を解析することによって、新しい道が出来るようにも思うが、先生はどうお考えか。

---

<sup>20</sup> 1908年7月から8月まで『朝日新聞』で連載、『四篇』収録)

## (佐伯)

「夢十夜」は少し異様な作品で、非常におそろしい話が出てきたりして、漱石の無意識のうちにある不気味なものが出ている。人によっては、漱石はただ神経衰弱だけでなく、精神上の問題があったのではないか、という角度から論じる人もいる。漱石はこういうことも言っている。自分は霊みたいなものがある意味で信じている、でも見たことはない。英文学は霊的なもの、この世の中を超えたものに近づこうとするところがあり、漱石のそういった独特なところが、一方で漱石を英文学に近づけた理由でもあり、同時に西洋的な合理主義に対して非常に反発した理由にもなっているかも知れない。そういうところはおっしゃるように西田とは違う。西田にはそういう面がない。西田と漱石はほぼ同世代である。西田はかなり長生きしているので、漱石と同世代と言う感じがあまりしないが、実際にはほぼ同世代で、同世代にしてはたしかに少し資質が違うかもしれない。ただ、同じような問題を抱えたと思う。西田も西洋哲学を勉強したけれどもどうも満足出来ないし、自分の人生の不幸の中から経験する実感と合理的な西洋哲学が合わず、それで自分なりの哲学を作ろうとした。言ってみれば漱石のいう自己本位のようなもので、自分で考えて自分で哲学を作らないと仕方がない。そしてあの難解な哲学が出てきた。最終的に西田が目指した境地も一種の自己滅却、無化、無私、出来るだけ自分を消して無にしていくということで、そういう方向に向かうことで彼は西洋哲学を乗り越え、自分の人生上の苦難を克服しようとした。人間的な資質はだいぶ違うと思うが、そこは方向として漱石と似ていると思う。

### Q3 西洋的近代化の過程で、「主体」感を喪失した日本人。彼らは、何を求めたか。

「私の個人主義」は、漱石の人生と重なりあっている部分があると思う。漱石は受け身の人、攻撃を受けやすい人、やられっぱなしの人だったと思う。まず親にいじめられたし、記録はないがイギリスでも相当いじめられたのではないかと思う。やられっぱなしというのも、奥さんとの手紙のやりとりの中に表れている。奥さんが、イギリス女性と浮気していないかと相当心配する手紙を書くが、漱石はするわけがないと防戦するだけであった。そういう資質があると思う。

ある時漱石は居直って、自己本位という境地に至った。自己本位には、他のやつは構わない、自分だけでやるという気持ちがあると思うが、すぐに漱石はそれではやっていけない、他者と協働しないとやっていけない、他者を助けたり、他者に助けられたりすることがあることに気が付いた。そして「私の個人主義」では、他者との共生が必要だと言っている。漱石の人生そのものが「私の個人主義」という講演に反映されているのではないかと思う。そして最後に則天去私に至ったようで、漱石の晩年の写真を見るとその境地に至ったようにも見えるが、実際には至ってなかったと思う。

そういう漱石を知るには、森鷗外と比べるとはっきり分かると思う。鷗外は漱石と正反対で、ドイツに留学したが、ドイツ語を流暢に話し、ドイツ語で論文も書けて、すぐ順応してしまった。ところがその後は違って、鷗外が書く小説は非常に純日本の小説であるのに

対し、漱石は、「吾輩は猫である」や「明暗」を見ても、小説の中では和洋折衷であった。ところが、二人の最終的な結論は同じで、利己主義や西洋的個人主義ではだめで、日本的な他者を大事にするようなことが大切だと言っている。最終的には二人とも私を捨てなければならないという。それを漱石は則天去私というし、鷗外の場合は「渋江抽齋<sup>しぶえちゆうさい</sup>」からの史伝三部作で言っているように、無私個人主義というものが日本の精神の在り方だと言っていると思う。

質問は、私たちの時代は個人主義以前に主体性がなくなっていて、主体性がないところではもはや則天去私もあり得ないと思うが、先生はどうお考えか。

(佐伯)

今日話してきたことでいうと、我々は明治の近代化以降、とにかく頭の中は西洋的なものを学んできた。そもそも主体という概念が西洋的な概念で、主体的でなければならないというのも西洋的な概念である。そういうことをずっとやってきて、明治の人達はそのことに対して葛藤していたが、戦後まで来ると葛藤もなくなってしまった。主体的であるかのように思っているが主体的ではないとも言えるし、主体的ではないのに主体的であるかのように振る舞っているとも言えるし、自分たちでものを考えたような気になっているが、実はそれは何かによって考えさせられている状態が、戦後70年続いている。特に社会科学や学問はほとんどそうである。

こういう状態が続き、ジャーナリズムがこれだけ大きな力をもって次から次へと言説を作り出してくる状況になると、主体的であろうとすること自体が、実は誰かに言わされているという気にもなってくる。そういう中で、そこからどうやって抜け出すかはものすごく難しく、私自身は悲観的にならざるを得ない。しかし逆の言い方をすれば、そういうことが近代日本の宿命的な問題で、その問題のレベルが戦後一段階高くなったとしても、同じようなことが繰り返されているということに気づけば、また少し変わってくると思う。それが主体的かどうか分からないが、そこでもう一度、我々が一体何者であって、どこに我々が抛るべき価値があるのかについて、考えるきっかけになると思う。漱石のように苦悩した人があるということも我々の共通理解にしていけば変わってくるのではないかと思う。

漱石と鷗外の対比も面白いし関心もあるが、福沢諭吉と漱石の関係も興味深い。諭吉は漱石より30数年年上であるが、ある意味で同じような状況に直面している。福沢諭吉は近代日本人の知識人の問題を一番鮮明に表していると思う。彼は、西洋の植民地にならないように日本は独立しなければならない、独立するためには日本は出来るだけ早く西洋の物を学び、文明を開化しなければならないと考える。そこには大きな矛盾があって、日本が独立するために西洋化する、西洋化すると日本は精神的に独立出来なくなる。精神の領域まで西洋化して、西洋的な形で考えるようになると日本の精神的な独立を保てなくなる。彼はそういうジレンマを抱えていた。彼がそういうジレンマに最終的な結論を出したかどうか分からないが、最終的に出てくるのは森鷗外に近いが、武士道のようなものであった。日本人の中には本当は武士的な精神があって、武士のもっているやせ我慢みたいなものがやはり大事

で、いくら西洋が力で押してきてもだめなものはだめだと言わないといけないと言っている。そういう武士的な精神があれば日本は辛うじて独立の気風を保てるというところになんとか落ち着いているのが福沢である。

こういう大きな流れの中でいうと、漱石の抱えた問題もこの流れの中にあると思う。日本は西洋化していかないといけない、西洋的な勉強をしないといけないという中で漱石も英文学者になった。しかしそれをやればやるほど自分の内部が空洞化してしまい、西洋人でもないのに西洋人のものまねばかりやっているということになり、それは福沢論吉が心配したことである。そして漱石はもう一度禅的なものに戻ろうとし、救いを求めようとした。鷗外は武士道的なものに回帰しようとする。両方とも自己を出来るだけ捨てて行く。西田哲学の場合には無の思想というものになる。みんな同じような問題を抱えていたと思う。

#### Q4 漱石は、自らを「知識人」として意識していたか。

漱石自身は自分自身を知識人と思っていたかどうか、先生のお考えをお聞きしたい。

(佐伯)

漱石自身がどう考えていたかは分からないが、彼は自分を知識人だと全く思っていなかったと思う。そういう仕事に就いてしまったからには、知識人的な振る舞いもしないといけないし、知識人とは一体何かと考へただろうが、心の中はそんなものには関心がなかったと思う。しかし、弟子たちを育てていて、弟子がその次の世代の知識人になっていくので、そういう意味では彼の社会的ポジションは知識人である。そこが漱石の不幸で、彼自身はそういう人ではない。そういうポジションに自分を置いしまった、置かされてしまったという矛盾したところがあるように思う。

#### Q5 文章の達人、漱石の資質を如何に評価するか。

さきほどの補足だが、漱石と鷗外を比べると、鷗外は精神的に随分偉大な人だが、鷗外は小説が下手で、漱石は小説が上手い。小説は会話のところが難しいが、漱石はどこで勉強したのかと思うくらい非常に上手い。ドフトエフスキーから随分影響を受けていると思う。

(佐伯)

漱石が書いていることはものすごく平凡なことで、特別なレトリックも何も使っていないが、非常に読ませるし、読んでいて気持ちいい。これは不思議である。例えば、小説ではないが「思ひ出すことなど」の中で、修善寺の大患のことを書いて、牛乳を飲むところがあるが、こんな一節がある。

一実を云うとこの日は朝から食慾が萌さなかったので、吸飲の中に、動く事のできぬほど濁った白い色の漲る様を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜るしつ濃い乳の味を予想して、手に取らない前からすでに反感を起した。強いられた時、余はやむなく細長く反り返った硝子の管を傾けて、湯とも水とも捌けない液を、舌の上に沁らせようと試みた。それが流れて咽喉を下る後には、潔よからぬ粘り強い香が妄りに残った。半分は口直しのつもり

であとから氷（アイス）クリームを一杯取って貰った。ところがいつもの爽やかさに引き更えて、咽喉を越すときいったん溶とけたものが、胃の中で再び固まったように妙に落ちつきが悪かった。<sup>21</sup>

牛乳一杯飲むだけでこれだけ書いている、非常に上手い。よく自分自身を観察している。特別なことを書いていないが、こういうところが漱石のすごさだと思う。一種の職人のようで、一つひとつ石をあてはめていって一つのを構築していくような、非常に職人的な感じがする。

---

<sup>21</sup>岩波文庫「思い出すこと事など」p48

## 「頭でわかる」ことと、「心でわかる」こと

私は、中学のころはほとんど本を読まなかったのですが、高校になってから、やたら大部な小説を読みたくなり、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」やマルタン・デュ・ガールの「チボー一家の人々」や、トルストイ、ドストエスキー、トーマス・マンなどを読んで、感動、というより感嘆しました。ヨーロッパが生み出した文学や思想はすごいものだと思います。そして、その後、西洋の社会科学や社会思想や哲学を自分なりに勉強しました。西洋の学問は基本的に、合理的な論理で、誰が読んでも、それなりにわかる普遍的なものをめざしています。

こうした勉強はたいへんによかったと思いますが、あるときから、こうした西洋発の学問が、日本人（あるいは東洋人）である自分に果たして本当にわかっているのか、という気がしてきたのです。そして、それをそのまま日本という土壌に持ち込むことが本当に適当なのか、と思うようになりました。

その頃から、改めて、日本人としての私のなかにあるものは何なのか、ということが気になりました。そして、これも高校の頃、小林秀雄の評論やそれに漱石なども好んで読んだことも思い出しました。それらは、西洋の文学や思想とはかなり違ったものです。そして、こちらの方は、感動というものではないにしても、感覚的にはよくわかるのです。頭を通してわかるというより、感覚的にはいつてくるのです。

私には、これはどちらか一方をとる、というのではなく、この両者が必要だと思われまふ。頭でわかることと、心でわかる（腑に落ちる）ことは、少し違っている。しかし、その両方が必要だと思うのです。今の時代は、ともすれば、「頭でわかる」ことだけが重視され、情報機器のおかげで、ともかくもよく知っていることが重宝されますが、「心でわかる」ことこそが本当は大事なことで、それは、何でもよく知っている、ということではないのです。

皆さんは、今、まずは、教科書や受験参考書を勉強しなければならないでしょう。それは基礎知識として知っておくべきことであり、また思考のトレーニングでしょう。本当に面白いことはその先にあります。自分のテーマを見つけて、それを自分で納得する（心でわかる）ような読書や勉強をしてもらいたいのです。

2015年10月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所  
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)